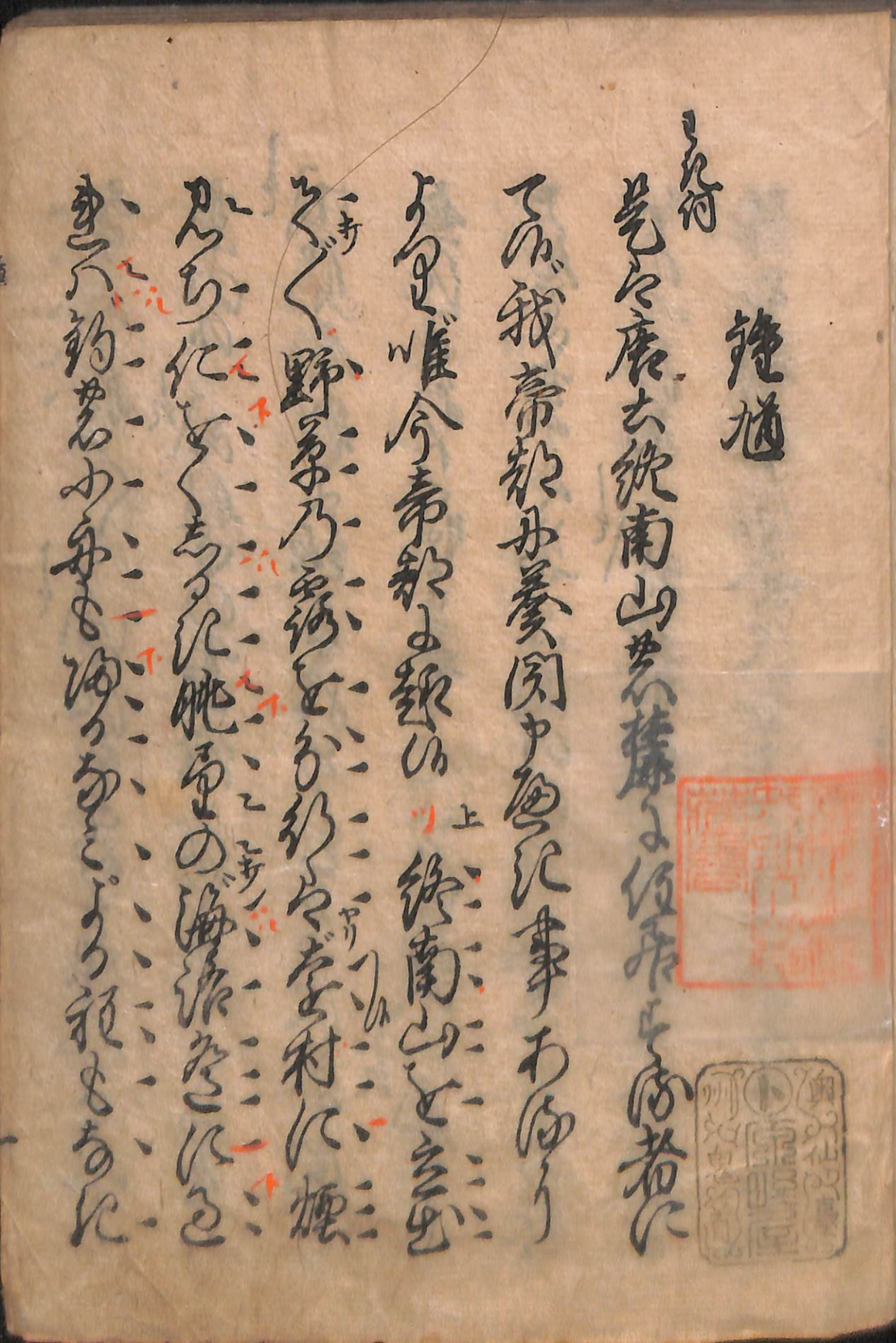
912.3
シ



鍾馗

是は唐土終南山若樵に行者に
て有ば我帝都ハ養関中無比事あり
よ里唯今帝都に趣ハ 上ツ 終南山を立出
ひぐく野菜乃露を分行ハ学村に煙
ひ見ち化をくしるに眺望の海語を見に
思ハ釣若小舟も海ゆるよう程もなに

斯の如く いよいよ家業に精を入申べき
事なれば それぞれの家業を継てゆくゆくは其
國家帝都の繁昌を継て其家業を
為には それぞれの家業に精を出して 家業に精出す事
大悦の事ハ安き間の事也 然ハ我家業
をのへ継 我が家業其家を繁昌と
静め 猶又家業安全にして富貴の楽しみあり。

右は大事を能く守り 子孫へいよいよ相
続の家業を守り此の上の繁昌を極め候て
萬事に心掛け候へ これ先祖の家名をも汚さず
此身にいたる事 先祖の恩高祖の
世に鍾馗といふ 故事をしらぬもの有るを
こんなに言出せし一念壇立て義世に
相違あり 家業に精出し 世に

のぞ誓願若は誓ひいかゞ謂なほ
らん 鐘 旭及牙 ぐ見きむ
とてせし悪心を魏を一念發起量提心
なりとや 宮 ふこゝ誓ひとて西去
と静めて行くなと 禁裏雲井の梅
宮乃 宮 ふこゝ愛満しゃおりひ
御殿 廊下ゆしゝ偕若なとも

ほりに御記そめて思ひたのひりを
むまハ案のおとく鬼神を通力せず
されしりをあらま化はほとくにきり
ちなりて海のあらりなりもいきかひ唯
此鉢乃威光となりて天にかゝる地は
お海祈ぐおき海り図をとなり事治なる
と成すもぞ宮のこゝに誓ひかなく

笠そ陽そなり春ろや杉鶴屋をし夜れ遊
屋門趣うし我々そとの演子鳥孫にそそ
なくよりの事そなれり往事渺茫と
しそ都て夢に似たり　棄趣零落しそ
半影に過ぎ　とそも浪世をいくる夜は土
農工商れ家にもせれど　又ら琴碁書
畫をうるむ男ともなる須　只明くも蓋そ

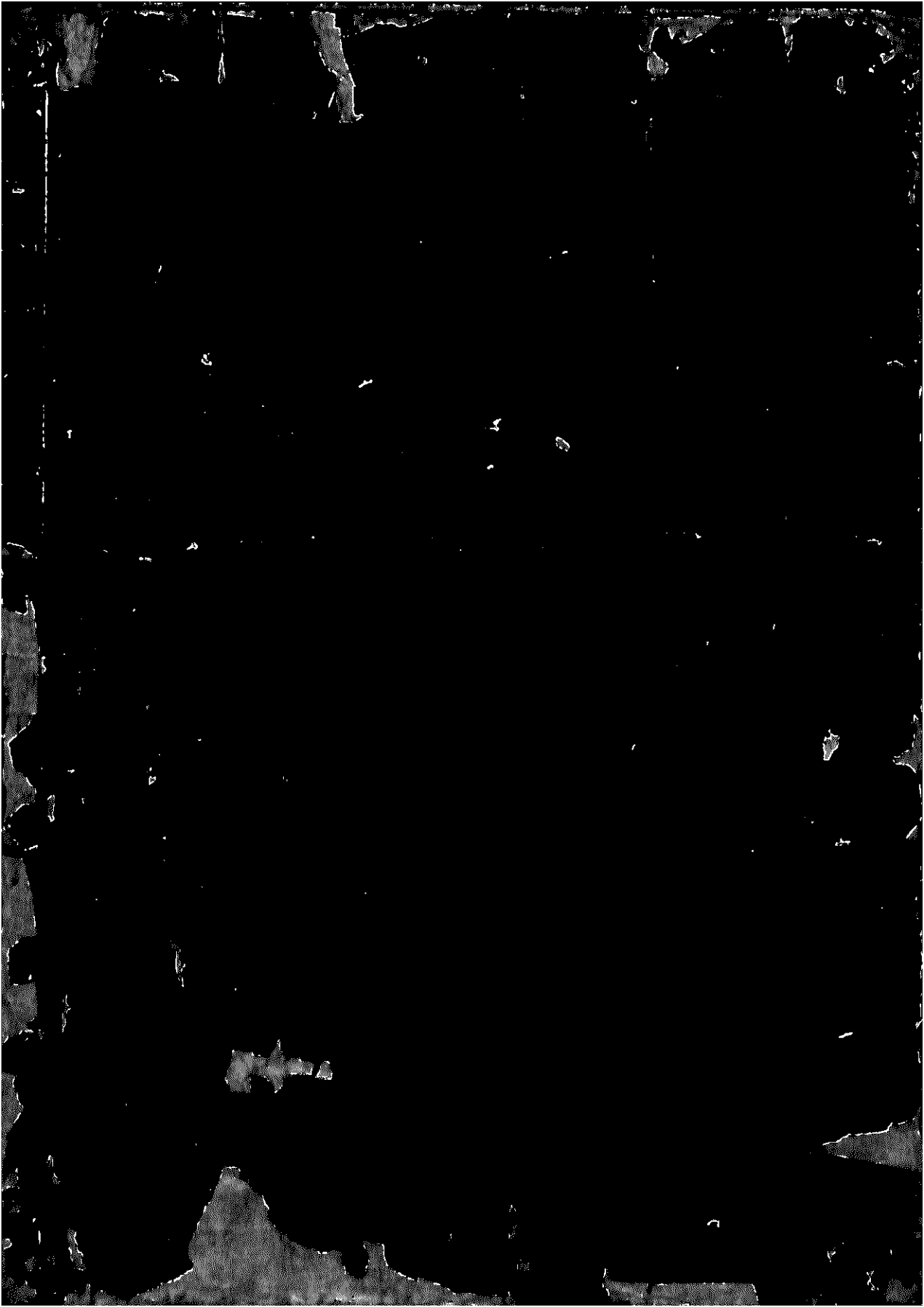
も穀せをいくるを　生くる所喜の日も不
能多く孫は附をうるひ嫁の勢もしよな
かは遠とも漢出志ろふく解海事なし九
夜れ天も暑をわせれ　雲冬のあしたも
寒うら守　中ヨリ麻をぬ獵師ら山をあるとと
いふ事ありが男れくるさも出しあるもすれ
草のをひ鳥ぐ縄をあし門垣の末れ杉山

風あまたく神に波らせ澳の衣みな于渡と
ゝ濟らかりし黒まれもだれ塩竈身をこ
ゝ鉢ひとも忌まるなとわさをなしし
物しさに抑馬頭屋をとるのとまくに
かりさが穀生の中に無悲屋なけ馬乃
恩なりかれ筑波根乃おもれ梢ゆもちをし
女浜の浮巣をもかけまし平砂に子浜

舞て落鴈れだるなや親をかくをとどれと
うとふと呼まてぶを屋をとると苦へきり
されたられやをとる　うとふ親を印まて血
の浪どくぬ也をぬれとする義屋笠
とうふけ家かしらのぶりとりあてうま
笠がれ義にもわられも粉浮ゆ血乃
浪ゆ同も紅にそこわるなぶ葉の格のさ

桜川の名もなかりしき花のちりともおる
ふもせしとしふ也　いくれをゆくもかりつ
やぎになふ事も縁にありぎらざるなり
をきつくしよりぶ東海の桜川まで下
里結ふも縁よるふ　先は川の名になふ
事ぞ花にあらけて名蓋ありぬ書き
ゝ有にいりに　実ゝしりし此書きもど

ゆけき花の枝よりいまさ見もせぬ常陸
の国に　名も桜川　わりと　ゆかく
常よりも表へまゐれてさくら川ぐのと
乃花うそ浦なくよりあとよそれハ花
乃雪も書きもふる花名のゝ結るよの
さくら川漸くの白波しけ連ハ霞浦
なりに志るのうき鳥のうへくあれ花

右下係諦者往々板
行雖多言違章誤難
計勝今亦闕不善補
不足當流秘密之加
拍子令改正者也
元禄二歳己巳初冬吉辰
[illegible]猶南通三町目

[illegible]
第 1911 號
[illegible]
36. 3. 14